

寝殿造の空間と庭園

—平安時代の庭園と建築に関する基礎的考察—

溝口 正人

キーワード：平安時代・寝殿造・寝殿造庭園・浄土庭園・作庭記・多様性

1. はじめに

平安時代になると庭園を伴う寺院が多く造営され、上層貴族の京中の邸宅や郊外の別荘にも庭園が設けられた。このような寺院や邸宅における庭園の造営は奈良時代でも確認できるが¹⁾、平安京およびその近郊において庭園を伴う寺院や邸宅の事例は比較にならないほど多い。また平安時代には鳥羽、白河のように郊外に庭園と多くの建築群を伴った大規模な離宮が造営された。そのほとんどは歴史の流れの中で失われてしまったが、京都の宇治に現存する平等院は、平安時代の建築と庭園の関係を伝える貴重な遺構であり、現在は池汀線や洲浜が発掘の成果に基づいて復元整備されている（図-1）。

平安時代の庭園の動向を考えると、浄土思想に基づく仏寺における建築と庭園が一体となったいわゆる浄土庭園と、貴族住宅における建築と庭園が一体となった寝殿造庭園の存在が注目される。両者は宗教空間あるいは信仰に基づく空間における庭園と日常空間としての住空間における庭園という相違があり、構成要素としての建築種の相違がある。一方で実現した物質文化としてみた場合、両者の相違以上に庭園そのものについての共通性を見いだすことは容易であろう。

筆者は、平安時代の建築の実態を把握した上で、その実態がどのような建築観に基づくものであり、さらに実際の建築の形態はどのようなものであったかについて考察し



図-1 平等院鳳凰堂（阿弥陀堂）における建築と庭園の現況
池汀線や洲浜は発掘に基づき復元整備されている。

た²⁾。そこで確認した仏堂の建築的な実態により、平安時代においては建築種の枠組みにとらわれない理解が必要であることを示した。建築と庭園との関係についても同様で、浄土庭園と寝殿造庭園における仏堂と寝殿という建築的な差異に注目する前に、空間的な実態としての両者の差異と共通点に注目すべきこととなる。

つまり両者の空間的な実態は確認しておくべきであり、また庭園と建築との関係性も、建築種の相違にとらわれずに把握する必要がある。そこで本稿では、平安時代の建築と庭園がどのような関係にあったのかについて、平安時代の同時代的視点から考察することとしたい。

2. 寝殿造の実態

建築的にも空間的にも仏寺に転換可能であった寝殿造の実態について庭園との関係から整理しておこう。近世以来の寝殿造と書院造に関する研究史については川本重雄により詳しく総括されている³⁾。寝殿造の建築的な実態を解明する研究は戦前に始まり、近年は儀式と殿舎構成の相関の分析から寝殿造の再定義が進んでいるが、昭和50年代以降、儀式との対応を含んで殿舎群の対称性をどのように理解するかが問題となってきた。

院政期の貴族である藤原宗忠の日記『中右記』には、六角東洞院殿に関して記した「東西対東西中門如法一町之作也」(元永2年3月21日条)、あるいは三条鳥丸殿について記した「如法一町家、左右対中門等相備也」(天仁元年7月26日条)のように、当時の貴族住宅に関して「如法一町家」あるいは「如法一町宅作」と記す事例がある。川本は「如法一町家」と記される事例で東西の対が同じではないこと、儀式の変化がそれを促したと考えられることを指摘し、むしろ建築的には東西対称ではないものが、平安時代中期以降の貴族住宅の理想像であったとした⁴⁾。ただし平面の復原が可能な事例が限定されるため、川本の問題提起の是非は決着をみていない。

建築と庭園の関係を考える上で注目しておかなければ

ならないのは、儀式空間としての南庭とその南の園池の存在である。任大臣大饗や朝覲行幸に代表されるように、南庭と寝殿を主体に展開される儀式は、貴族が社会秩序に基づく自身の存在を第三者に示す重要な機会でもあった。多くの文献史料や発掘遺構を参照しながら平安京の変容と寝殿造の成立について包括的に考察し、寝殿造の再定義を試みた藤田勝也は⁵⁾、寝殿を記さない『中右記』の「如法一町家」の記述から、対称性を認識する視点を寝殿からみたときの囲繞性とみる。しかし『年中行事絵巻』における場面描写が南庭からの視点で描かれるように、想定された対称性は、太田博太郎が指摘するような⁶⁾儀式空間としての南庭からみた視覚的な囲繞性を主体に考えるべきなのであろう。

『年中行事絵巻』に描写されるように、南庭での儀式的舗設は園池の中島にも及ぶ。建物と前庭(南庭)や園池との空間的な一体性は平安時代貴族住宅の前提とも考えられ、『家屋雑考』をはじめとして多くの復原図でも示されるように南庭の南に中島を設けて園池が築かれることは必須であるように思われてきた。しかしながら藤田によれば、白河上皇御所となる12世紀初頭の三条鳥丸殿、11世紀末の藤原師実の大炊御門殿、12世紀初頭の高松殿では南園池が不在であり、さらに『中右記』に「如法家」とされる大炊御門東洞院殿や土御門高倉殿も南園池不在の可能性があるという。「如法一町家」三条鳥丸殿において南園池が不在であったということは⁷⁾、少なくとも南庭での儀式的挙行を前提とした貴族住宅においても、南園池の存在は十分条件ではあれ必須条件ではなかったということを示している。

3. ボイドとしての南庭

成立年代の議論はあるにせよ、『作庭記』は平安時代の造園技法と庭園観を記したものとみてよい⁸⁾。同書には、多くの論考で取り上げられているように貴族住宅における南庭と園池に関して規模設定に言及した以下の記述が

ある⁹⁾。

南庭をく事は、階隠の外のはしらより池の汀にいたるまで六七丈、若内裏儀式ならば八九丈にもおよふへし、拝礼の事用意あるへきゆえ也、但一町の家南面にいけをほらんになを八九丈をかは池の心いくはくならさん敷、よくよく用意あるへし、堂社などには四五丈も難あるへからず、又嶋をくことは、所のありさまにしたかひ、池寛狭によるへし、但しかるへき所ならば法として嶋のさを寝殿のなかへにあてゝ、うしろに楽屋あらしめんことよういあるへし、楽屋は七八丈におよふ事なれば、嶋はかまへてひろくおかまほしけれと、池によるへきことなれば、ひきさかりたる嶋などをきてかりいたしきをしきつゝへきなり…

南庭の南北広さは一般的には6～7丈(18～21m)であり、内裏の儀式を行う場合には、拝礼を挙げるために8～9丈(24～27m)が必要であり、堂社つまり御堂など南庭の儀式を想定しない場合は4～5丈(12～15m)でも支障はないとする。ただし一町家の場合、南庭を8～9丈とすると十分な池の広さが確保できないことも指摘する。また儀式の時に7～8丈に及ぶ楽屋を設ける南園池の中島の大きさについても言及する。

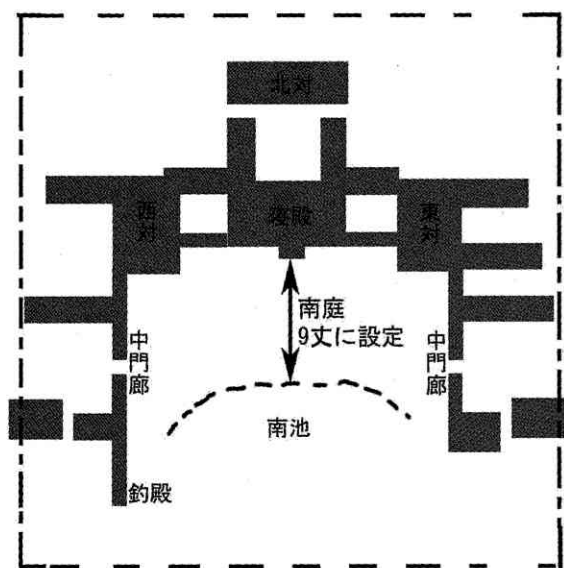


図-2 方一町の敷地での建築と庭園の関係
東三条殿東面の殿舎構成を東西に想定した場合

ここで示される南庭は、儀式のために意図的に作られた空閑地、ボイドである。住宅と寺院では庭園を作る上での技法に差異はなく、相違はこのボイドの大小だけである。そして南庭の大きさを決定する要因は一義的には挙行される儀式との関係であることが分かる。ただし方一町の敷地で寝殿の東西に東三条殿と同様な規模を持つ対や侍廊を想定した場合、東西40丈では殿舎が納まらないという問題も生じ¹⁰⁾、南北幅も40丈では十分ではない(図-2)。東三条殿にみる建築的な充実は、平安時代を通じての変遷の中で形成されたものと考えられ、南庭の広さも、挙行される儀式の整備に伴って定着したのであろう。三条烏丸殿の場合、公的立場の複数人物が同居して家政機関も多くなり殿舎も相応して多かったと考えられ、さらに拝礼が行われるだけの南庭の広さも必要となる。そのため南園池を設けるだけの空閑地がなかったのであろう。藤原道長の土御門京極殿、東三条殿、堀河殿など、摂関家住宅で南北一町以上の敷地規模を有する事例が確認されるのも、十分な空間を確保する相応の敷地規模が必要であったからと考えられる。川本重雄の復元による東三条殿と浄土式庭園の事例としてあげられる現存遺構を比較すると、方一町の敷地で造営可能な庭園に限界があることがわかる(図-3)。

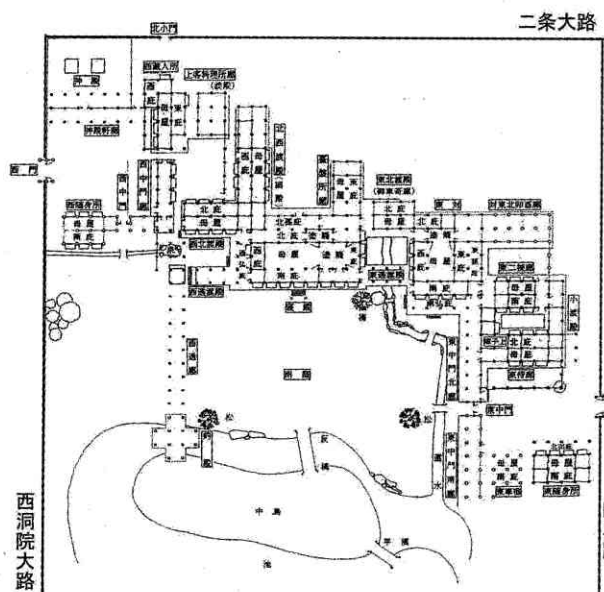
またここで問題とされているのは儀式のための広さであり、対照的に南園池と寝殿など建築との空間的な関係については言及されない点にも注目する必要がある。里内裏や院御所などで拝礼を行うために24～27mの奥行きで設けられた南庭は広大な儀式空間であり、南庭を介した寝殿と南池や中島までの実際の距離は、感覚的な一体感を得るには離れすぎている(図-4)¹¹⁾。『年中行事絵巻』では南庭を介して園池と寝殿が近く描かれているが、絵画的なレトリックと理解すべきであろう(図-5)。

一方、御堂など南庭での儀式を想定しない場合は、純粹に庭園と建築とをどう関係づけるかで南庭や園池の位置、大きさが決まることとなる。南庭を確保した住宅と比べれば、平等院鳳凰堂では実態として庭園と建築が密接な関係

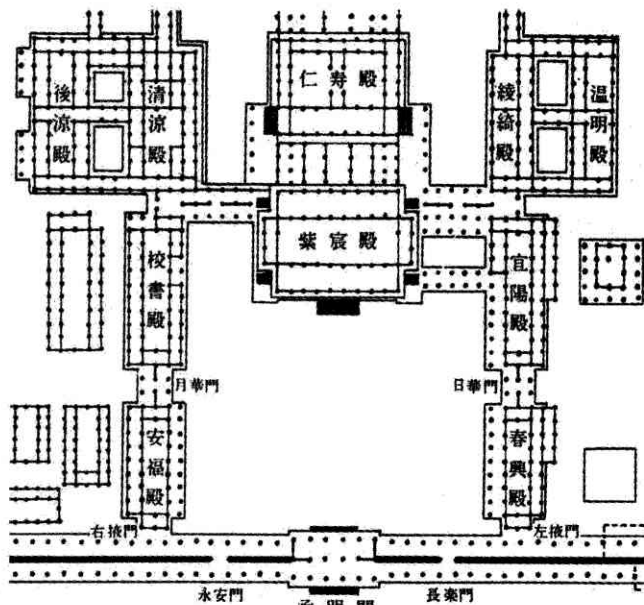
になっていることが分かる(図-4)。条坊制により敷地規模が限定されたうえに、儀式以外では巨大な空閑地でしかない南庭を寝殿など主要な殿舎と園池との間に抱え込んでいた貴族住宅と、平等院のように建築と庭園が「見る・見られる」という直接的な関係を持つ場合とは、単なる南庭の大きさの相違にとどまらない本質的な相違があった

ということになる。

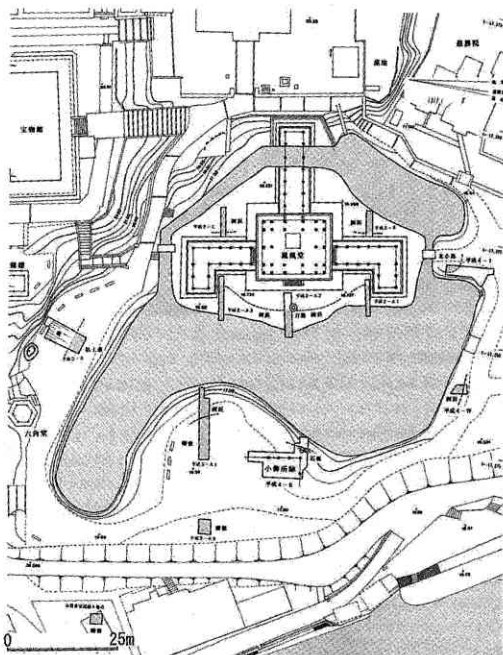
藤原道長により造営された法成寺は、九体阿弥陀堂造営の初例で形式や装飾においても画期的であり、仏堂建築の多様な展開の端緒となった¹²⁾。しかしながら庭園と建築との関係でみれば、平坦な京極の地に造営され、塀で囲い込まれたなかに長大な建築が園池を取り囲んで稠密に建ち



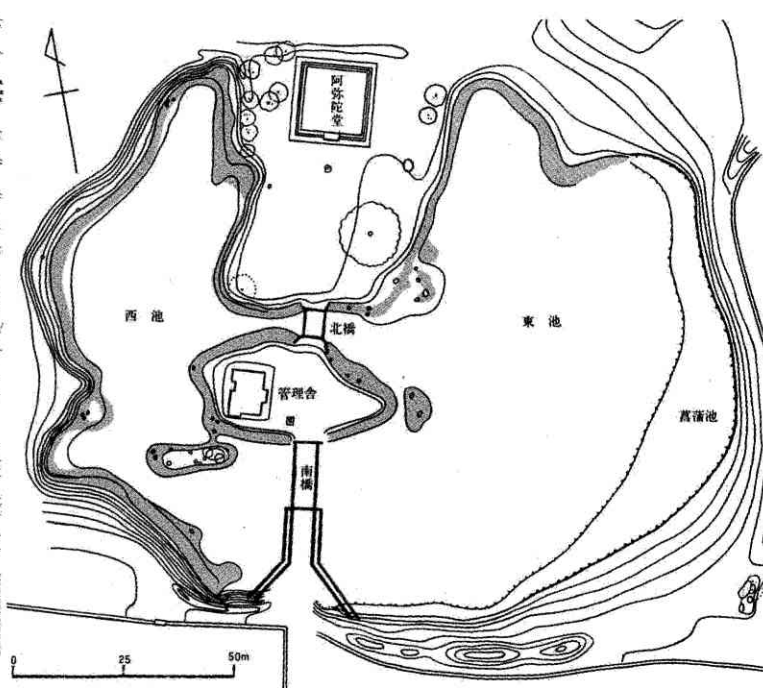
東三条殿(川本重雄/寝殿造の空間と儀式)



平安宮内裏南半部(平城宮発掘調査報告Ⅲ)



平等院(庭園調査発掘調査概要報告Ⅱ)



白水阿弥陀堂(森蘊/日本庭園史話1981)

図-3 同一縮尺で比較した建築・南庭・園池の規模

並んだ構成を示す。園池からみた視覚的な囲繞性を主体とする点で、いわゆる寝殿造と同種の構成である。これとは対照的に平等院では本堂（寝殿）や阿弥陀堂（鳳凰堂）が周囲と一体となった園池の中に配置されている。このように建築と庭園との関係からみた法成寺と平等院との相違は大きなものといわなければならない。公的な儀式を想定しない郊外の別荘や仏寺においては、平等院と同様に住宅、仏堂、園池が一体となった空間が実現された。そのため前述したように禁忌に触れるような状況も生じたのである。

4. 寝殿造の殿舎配置と庭園

長久4年（1043）に造営された東三条殿は史料の豊富さからもっとも詳細な復元が可能であり、平安時代貴族住宅の代表的な事例としてあげられることが多い。しかし後院

や里内裏、洛外の離宮など、摂関家住宅とは異なる建築的展開を示した事例も存在した¹³⁾。住宅史における東三条殿の位置づけは簡単ではない。

むしろ庭園との関係で注目すべきは、西対が存在せずその位置には泉（千貫泉）があり、その西南に小高い築山があった点であろう。先学に取り上げられてきたように、『大鏡』（巻五）には藤原兼家が東三条殿の西対を「清涼殿づくり」にしたため非難の対象となったことを記す。兼家が造営した当時、この泉や築山がどのような状態であったかは明らかではないが、少なくとも長久4年の段階では、これら泉や築山を撤去してまで西対を造営する必要性を認めていなかったことは確かである。

同様に殿舎配置が園池との関係で決められたと考えられる事例として堀河殿がある。白河天皇、鳥羽天皇の里内

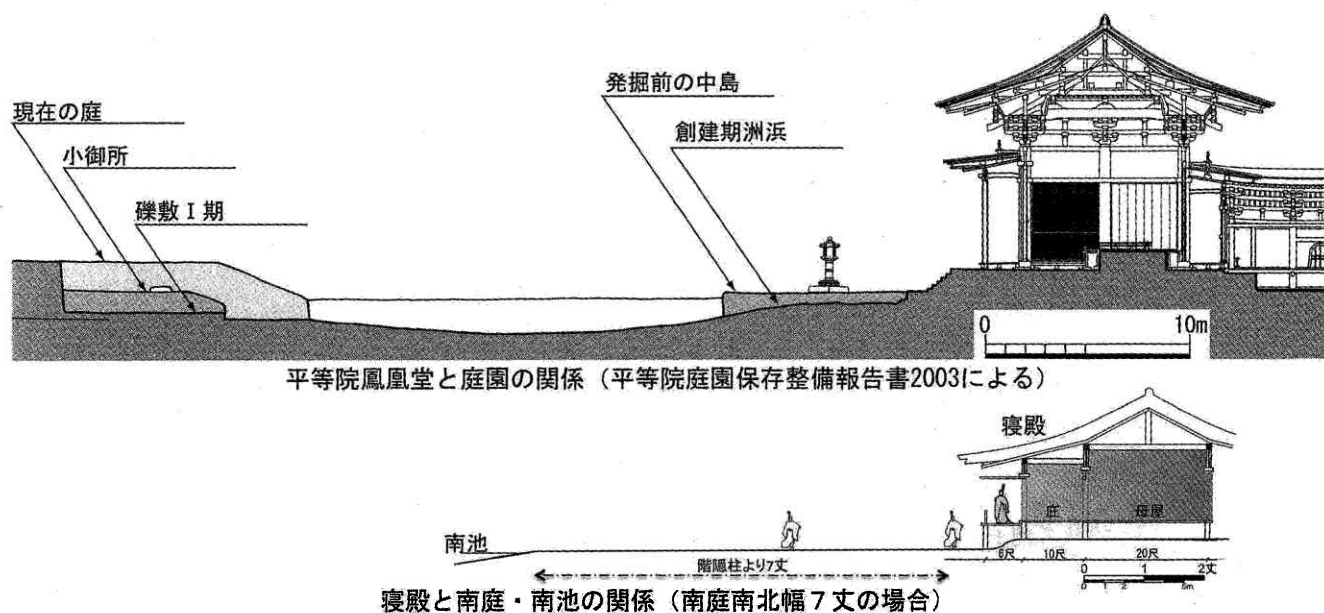


図-4 寝殿造住宅と平等院鳳凰堂における建築と庭園の関係

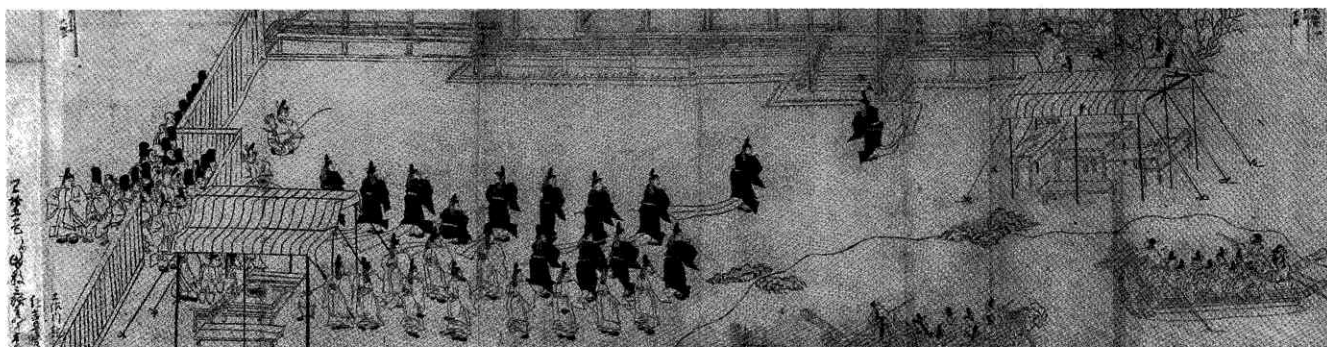


図-5 『年中行事絵巻』第十巻に描かれた東三条殿の南庭（日本絵巻物全集第24巻、角川書店1968より）

裏であった堀河殿については、文献史料に基づく太田静六の詳細な研究があり復元図も提示されているが¹⁴⁾、平安時代後期の園池が発掘されて殿舎位置との関係が検討できる。太田静六は堀河殿の敷地南北を二町とみるが、九条家本延喜式所載左京右京図には平安末期の堀河院の敷地南限を三条坊門小路より北に描く。同様な小六条殿の描写の妥当性が発掘により確認されており¹⁵⁾、堀河殿の場合も南北一町半程度とみて遺構図に復元図を重ねて配置したものが(図-6)である。太田静六が文献史料により復元した平面は東面が対ではなく対代廊で中門が北に開くが、この構成が東側に大きく広がる園池に対応した構成であることが理解できる。

すでに多くの指摘があるように、平安京右京六条一坊五町で確認された平安時代前期の発掘遺構では南庭と呼べる空間は存在しなかったことが明らかとなった。また斎宮宅と想定される右京三条二坊十六町では、敷地北半部の中央に園池が確認されている。このような状況を踏まえると、『中右記』に記されるような「東西対東西中門如法一町之作」は、理念としても実態としてもかなり限定された存在であったと考えられ、また東三条殿西面や堀河殿東面の構成にみる庭園と建築の関係をみると、池や泉といった敷地の状況が重視されて建物配置に大きく影響を与えていたと考えざるを得ない。一方で前述のように南に園池が存在しない事例も存在した。結果としてできあがる殿舎配置や空間の実態は驚くほど多様となる。この多様性を東西対称な配置であった寝殿造が変化した結果であると理解することも可能であるが、立地や用途の相違の

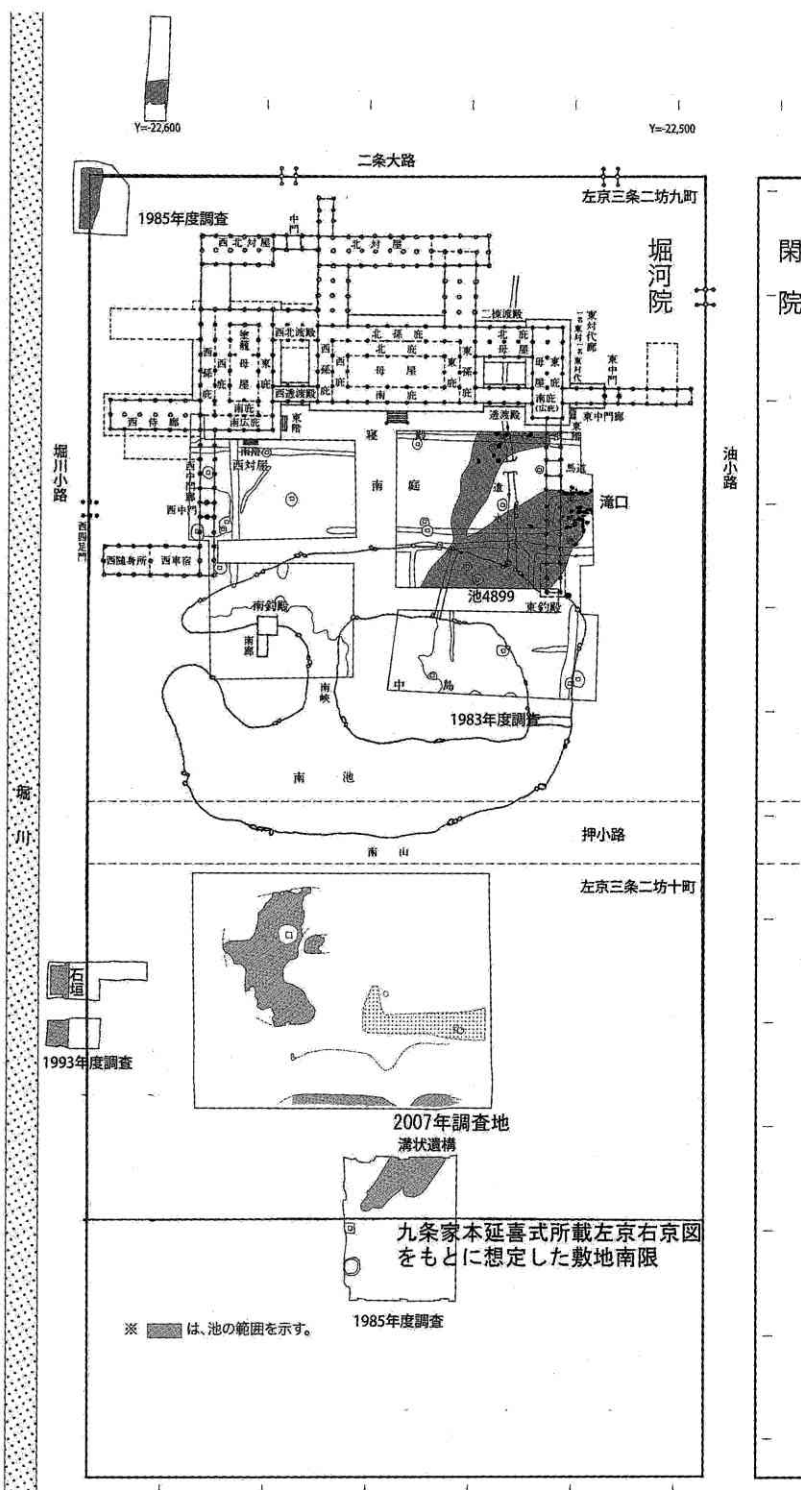


図-6 堀河院配置検討図

「平安京左京三条二坊十町(堀河院跡)現地説明会資料」所載 図3に太田静六復元図を加筆、修正。文献史料により復元される西側に偏った建物配置が、発掘により明らかとなった東側の園池の存在と関係していることが分かる。

反映としての多様性は、平安時代貴族住宅の実態として認めるべきである。

5. おわりに

以上、本稿では、貴族住宅において儀式空間と庭園が共存する場合の条件について確認し、庭園と建築の関係についてスケールの観点から具体的に分析した。

条坊制に基づく京内の敷地では、建築群や南庭で構成される儀式空間として園池は必須の存在ではなく、また建築的な充実を図ろうとすれば園池を設ける余地は限定され、逆に十分な園池を確保した場合、建築構成の変更が迫られることもあったのである。そして建築と庭園、双方の必要条件を実現する上で、条坊制の制約がある洛中の敷地は極めて限定されたものであり、結果として建築と庭園で形成される空間の実態は、個別の条件に応じて多様であったことを指摘した。平安時代の建築と庭園が一体となった空間は、そのための枠組みの設定が自由であった京外において実現したとみることができ、儀式などの制約がなく純粹に空間的な次元において建築と庭園の関係が設定可能となる浄土系庭園において、さらにそれは明確であったといえるだろう。

註記

- 1) 天平宝字5年(761年)の光明皇太后一周忌にあわせて造営されたと考えられる法華寺阿弥陀浄土院が、園池と一体となった仏寺として確認できる最初期の事例である。
- 2) 溝口正人「平安時代の建築観と建築的実態—『左経記』長元元年7月19日条の記述を手がかりとして—」名古屋市立大学大学院芸術工学研究科紀要『芸術工学への誘い』vol.15、2010、pp.129-135
- 3) 川本重雄「寝殿造と書院造—その研究史と新たな展開を目指して—」『シリーズ 都市・建築・歴史2 古代社会の崩壊』東京大学出版会 2005

- 4) 川本重雄「寝殿造の典型像とその成立をめぐって(上)」日本建築学会論文報告集 316号、1982 および「寝殿造の典型像とその成立をめぐって(下)」日本建築学会論文報告集第323号、1983 同『寝殿造の空間と儀式』中央公論美術出版 2005 収録
- 5) 藤田勝也「平安京の変容と寝殿造・町屋の成立」『シリーズ 都市・建築・歴史2 古代社会の崩壊』東京大学出版会 2005
- 6) 太田博太郎「公家住宅の発展と衰退」付記(『日本住宅史の研究 日本建築史論集Ⅲ』岩波書店 1984、pp.413~414)
- 7) 三条烏丸殿については平山育男「如法一町家 三条烏丸殿 如法一町家の研究 その2」日本建築学会計画系論文報告集 422号、1991を参照。
- 8) 飛田範夫『『作庭記』からみた造園』鹿島出版会 1985
- 9) テキストについては森蘊『『作庭記』の世界』日本放送出版協会 1986による。
- 10) 溝口正人「東三条殿復元案成立の前提」『芸術工学への誘いⅦ』岐阜新聞社 2003
- 11) 南庭の南北広さを7丈で作図。寝殿については、上野勝久「古代・中世の東寺大師堂の建築について」(東京藝術大学美術学部紀要 47号、東京芸術大学美術学部 2010、で復元された平安時代の東寺太子堂の構成を参考にした。ただし東三条殿など上層貴族住宅では庇梁間は12尺はあったと考えられる(拙稿 前掲注10参照)。
- 12) 清水擴『平安時代仏教建築史の研究』中央公論美術出版 1994。第2部参照
- 13) 溝口正人「鎮宅儀礼からみた里内裏の殿舎構成—里内裏の建築様式に関する研究(その1)—」日本建築学会計画系論文集第504号、1998。同「『内裏軸』の系譜—里内裏の建築様式に関する研究(その2)—」日本建築学会計画系論文集第588号、2005を参照
- 14) 太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館 1987、第4章

第6節。初出は昭和16年

15) (財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館発行
リーフレット No44. 1992. 8 参照

付 記

本稿は、溝口正人「平安時代の建築と庭園」(奈良文化財研究所学報『平安時代庭園史研究Ⅱ』2011. 3 所収)に発表した平安時代の建築と庭園に関する記述をもとに本稿の主旨に合わせて書き改めたものであり、科学研究費基盤研究(A)「日本建築様式史の再構築」(代表 藤井恵介)および科学研究費 基盤研究(C)「古代日本の宮殿の建築的特質と歴史的意義に関する研究」(代表 溝口正人)に基づく研究成果の一部である。